

研究主題「文章を読んで理解したことに基づいて

自分の考えをまとめることができる児童の育成

－筆者の書き表し方の工夫に着目して読ませることを通して－

東京都教職員研修センター研修部授業力向上課

中央区立豊海小学校 主任教諭 小田 貴弘

第1 研究のねらい

これからの社会はより一層、情報化が進展すると言われている。このような社会を生きていくためには、子供たちに知覚した情報の意味を吟味したり、文章の構造や内容を的確に捉えたりしながら読み解く力を付けていくことが求められている。

しかし、「平成28年度 児童・生徒の学力向上を図るための調査」の小学校国語4(3)「意図や背景、理由を理解・解釈・推論して解決する力」を問う問題において全都平均正答率が35.3%であった。このことは、私が日頃の指導を通して感じている課題と一致している。それは、児童には目的に応じて文章から必要な言葉を取り出し、比較・関連付けて考える姿勢はあるものの、なぜ関連付けたのかを説明することができず、根拠にした文章の引用そのものを自分の考えとしている姿が多く見られることである。

以上の背景から、文章を読んで理解したことに基づいて自分の考えをまとめることができる児童を育てていくため、本主題を設定した。

第2 研究仮説

高学年の説明的な文章を読むことの学習において、学習過程、教材・教具、学習活動を工夫した単元を開発し、筆者の書き表し方の工夫に着目して読ませることによって、文章を読んで理解したことに基づいて自分の考えをまとめることができる児童が育つであろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

国や都の学力調査の結果から「読むこと」に関する課題を把握し、各種先行研究を踏まえながら「小学校学習指導要領（平成29年3月）」（以下、「新学習指導要領」と表記。）に基づいて研究主題の設定をした。

なお、本研究では新学習指導要領に基づいて「筆者の書き表し方の工夫」を、「考えを伝えるために、どのような言葉を用いるか、語や文及び段落のつながりをどのように表現するか、といったことなどに注意して筆者が行った記述の仕方の工夫」と定義した。また、「文章を読んで理解したことに基づく」とは、「文章の内容や構造を捉え、精査・解釈しながら考えたり理解したりすることを基にすること」と定義した。

2 開発研究

(1) 学習過程の工夫

単元を通して「筆者の書き表し方の工夫」に着目させるため、主教材を用いた学習の前に既習教材を副教材に用いたプレ学習を設定する。既習教材を副教材に用いることにより、文章の内容や構造の把握に時間をかけず、本単元で身に付けさせたい力に焦点を絞って指導をすることができるからである。

(2) 教材・教具の工夫

ア リライト文の開発

本研究では、授業のねらいに応じて教師が書き換えた文章を「リライト文」とし、副教材によるプレ学習、主教材による学習のそれぞれの場面でリライト文を活用した学習を行う。プレ学習では、「筆者の書き表し方の工夫」について理解させるために一斉指導で用いる。その後の本教材を用いた学習では、個別支援を目的としてリライト文を用いる。なぜなら、児童がリライト文と教材文を比較することで教材文の「筆者の書き表し方の工夫」に気付き、筆者の意図を解釈することで文章の理解を更に深めることができるからである。

イ 付箋を活用したワークシートの開発

ワークシートにより自分の思考を視覚的に捉えられるようにする。「事例」を黄色、「意図」を青色、「主張」を桃色というように付箋の色ごとに分けて整理していくことで、「十分に読み取れていないことは何か」を明確にする。そのことで、児童は文章を読み進める上での自らの課題を把握することができる。また、つながりを意識して記入したワークシートを「事例」、「意図」、「主張」の順に読ませることで、自分の推論が妥当であるかどうかを確認することができる。

(3) 学習活動の工夫

平成 28 年 12 月 21 日の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」において、「対話的な学び」の実現に向けて、従来から行われている伝え合いや交流、話し合いといった相手と対面して行う「対話」に加えて、「本を通して作者の考えに触れること」も「対話的な学び」に含まれることが示されている。これを受けて、本研究では、考えを広げ深めるための「対話的な学び」を、「相手と対面して考えたことを伝え合い、自分の考えを深める対話」と、「説明的な文章を通して筆者の考えに触れる対話」と捉え、二つの対話を効果的に行うことができるよう、筆者と読者それぞれの立場に立った対話を行う。この対話は、読者役の児童が筆者役の児童に「筆者の書き表し方の工夫」について尋ねる形で進める。この活動を個の学習の後に設定することにより、児童は、「筆者の書き表し方の工夫」に着目して読むことに必然性をもって取り組むことができる。また、対話を通して、児童は、筆者の意図の解釈は複数あることを学ぶことができると考えた。

3 検証授業

(1) 検証授業の概要（平成 29 年 10 月・11 月 全 8 時間）

都内公立小学校第 6 学年において授業を実施し、仮説の検証を行った。単元名は「筆者の考え方の工夫を踏まえて、ネイチャー・テクノロジーを紹介しよう」である（表 1）。

表 1 検証授業における単元の指導計画

次	時	主な学習活動
第一次	第 1 時	学習の見直しをもつ。 ・学習課題を理解し、学習計画を立てることを通して見直しをもつ。
第二次	第 2～6 時	教材文を読み、筆者の考え方を読み取る。 ・既習教材で「筆者の書き表し方の工夫」に着目した読み方を理解する。 ・主教材を「筆者の書き表し方の工夫」に着目して読み、筆者の意図を推論することを通して文章を読み深め、筆者の考え方について自分の考えをもつ。
第三次	第 7・8 時	文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめる。 ・筆者の考え方を踏まえた、ネイチャー・テクノロジー紹介の準備をする。 ・ネイチャー・テクノロジーを紹介し合う。

(2) 検証授業の分析

ア 意識調査における児童の変容について

検証授業を行った都内公立小学校の第6学年児童30名に対して説明的な文章の学習について、授業の前後で意識調査を行った。

説明的な文章を読むときに気を付けることについて、「筆者はなぜそのような説明の仕方をしているのか」という項目に「当てはまる」、「やや当てはまる」と回答した児童は70.0%から86.7%に16.7ポイント増加した(図1上段)。しかし、「どちらとも言えない」から「あまり当てはまらない」に回答が変わった児童が1名いた。

また、説明的な文章を読むときに気を付けることについて、「筆者の説明の仕方について、自分はどう思うか」という項目に「当てはまる」、「やや当てはまる」と回答した児童が70.0%から80.0%に10.0ポイント増加した(図1下段)。しかし、「当てはまる」から「どちらとも言えない」、「当てはまる」から「やや当てはまる」に回答が変わった児童が各1名、計2名いた。

以上の結果から、児童は「筆者の書き表し方の工夫」に着目して読むことが理解できた一方で、身に付けた力を自覚できていない児童がいることも分かった。

イ ワークシートの記述について

「筆者はなぜそのような説明の仕方をしているのか」について、「当てはまらない」から「当てはまる」に回答が変わったA児と「どちらとも言えない」から「あまり当てはまらない」に回答が変わったB児の第二次の学習で実施したワークシートの記述を分析した。A児の記述では、筆者の立場に立って事例の挙げ方の意

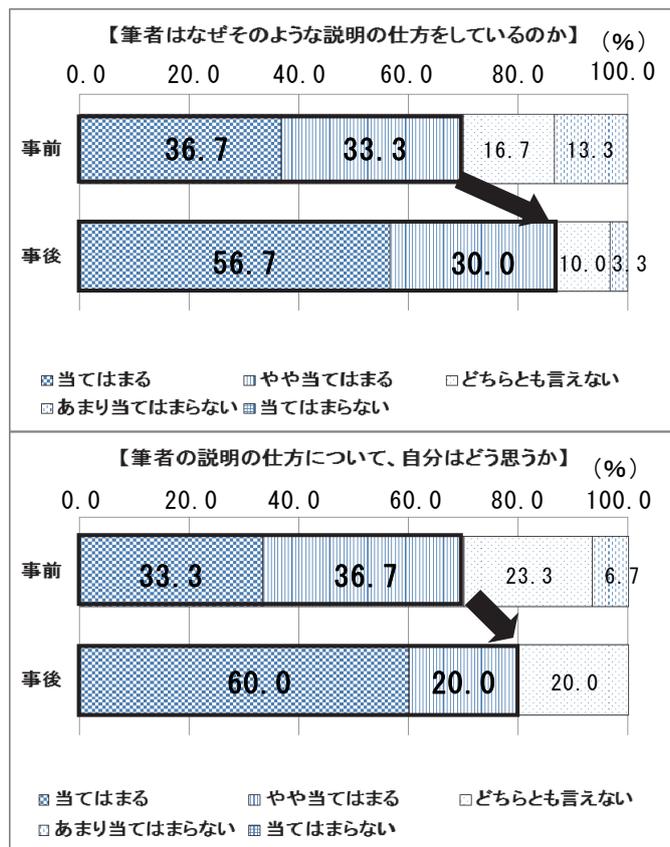


図1 意識調査における児童の意識の変容

A児

- ・リライト文では魚群探知機を例にしたが、これだと「資源を守る」ことにつながらないので、筆者は「資源を守る」ことに関係する事例を挙げた。
- ・筆者が挙げている事例は実現し始めているから、第9段落の「新しい暮らし方が見えてくる。」という言葉に説得力が増す。

B児

(記述なし)

図2 第二次の学習で用いたワークシートの記述

なぜ、蚊の針の仕組みに学んだ注射針を事例として選んだのかという読者役の児童の質問に対して

B児

僕は、注射は痛くて嫌なので、刺されても痛くない針があったらいいなと思いました。読者も、同じ気持ちだと思うので、この事例を紹介すれば、読者もネイチャー・テクノロジーが便利でいいものだと考えてくれると思いました。

図3 第三次の対話で見られたB児の考え

図を考えていることが分かる。B児は、推論したことを記述することができなかった（図2）が、第三次の学習で、自分の主張がより説得力をもつように理由を明確にして事例を選ぶことができていた（図3）。授業後、B児から話を聞いたところ、説得力をもたせるために事例を選ぶことを理解していたものの、筆者の立場になり、筆者の主張がより伝わるように事例を選ぶ言語活動に取り組みにくさを感じていたことが分かった。

次に、「筆者の説明の仕方について、自分はどうか」について、「当てはまらない」から「当てはまる」に回答が変わったC児と、「当てはまる」から「どちらとも言えない」に回答が変わったD児の第三次の学習で実施したワークシートの記述を分析した。C児とD児の記述から、両者とも筆者の事例の挙げ方について、根拠を示しながら自分の立場を明確にし、更により事例の挙げ方を自分なりに考え、表現していることを見取ることができた（図4）。このことから、児童は「筆者の書き表し方の工夫」に着目して読む方法は理解できたと考える。その一方で、自分が身に付けた力を自覚できていない児童がいたことも分かった。

C児

筆者の考え方に対し、私は納得できません。理由は、節約をすることだけを説明しても、便利な世の中にしたいて考えている人の願いが叶わないと思うからです。自分だったら節約することは、便利な世の中にもつながることを主張したいです。

D児

筆者の考え方に対し、私は納得できません。理由は一般の人たちは節約など大変な思いをしたくないと思うからです。もし、私だったら「泡のお風呂」で書いてあるメリットは二つしかないなので、もっとメリットの部分を増やして、簡単に節約できる順番で紹介するべきだと思います。

図4 第三次の学習で用いたワークシートの記述

第4 研究の成果

「筆者の書き表し方の工夫」に着目して読ませることによって、効果的に文章を読んで理解したことに基づいて自分の考えをまとめることができる児童の育成を図ることができた。このことから、本研究で講じた学習過程、教材・教具、学習活動を工夫した単元の開発は有効であったと考える。「筆者の書き表し方の工夫」に着目して読ませることで、筆者の説明の仕方を把握するために、筆者が挙げた事例の意図や段落と段落のつながりを考えながら文章を読み、理解を深めようとしている児童の姿を見取ることができた。このことは、意識調査における、児童の意識の変容（図1上段）や、A児のワークシートの記述（図2）から分かる。

また、文章を読んで理解したことに基づいて自分の考えを明確にしている児童の姿を見取ることができた。このことは、検証授業後の意識調査における、児童の意識の変容（図1下段）や、C児やD児のワークシートの記述（図4）において、根拠を示しながら自分の考えを明確にしていることから分かる。

第5 今後の課題

- ・ 「筆者の書き表し方の工夫」に着目して読むことを通して、児童が本時で身に付いた力を自覚できる手だてを講じる。
- ・ 今回の研究では、教材文の特性に合わせて「筆者の書き表し方の工夫」の中でも、事例と主張のつながりに着目をさせた。今後は、他の教材文において、どのような「筆者の書き表し方の工夫」に着目させて文章を読ませることが効果的であるかを検証していく。